お伽草子と民間文芸

民俗民芸双書

12

大島建彦（おおしまたてひこ）

1954年，東京大学卒業。日本学園教諭を経て，現在，東洋大学助教授，明治大学講師，文学博士。国文学・日本民俗学専攻。住所，東京都新宿区信濃町32。

民俗
民芸 双書12 お伽草子と民間文芸

一九六八年三月二十五日発行
定価 八二〇円

著者 ©大島建彦
発行者 岩崎治子
印刷 萩原印刷所
製本 渡辺製本所

発行所 岩崎美術社
東京都千代田区神田神保町一ノ五
電話(二九一)三一一二—四
振替東京九〇六四九

お伽草子と民間文芸

もくじ

お伽草子の研究……七
お伽草子の意義……七
資料の紹介と翻刻……一三
資料の整理と分類……一五
成立過程の研究……一九
お伽草子と昔話……二三
はじめに……二三
『蛤の草紙』……二五
『鶴の草子』……二九
『梵天国』……三四
『七夕』……三七
おわりに……四二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

『一寸法師』の性格……四四
一寸法師という名……四四
異常な出自……四六
異常な事業……四九
異常な幸福……五二
瓜姫の昔話と草子……五七
瓜姫の昔話の例……五七
瓜姫の昔話の型……六三
瓜姫の絵巻・絵草子……七〇
『鼠の草子』とその周辺……七五

『鼠の草子』の諸本……七五
相違点と一致点……七八
美女と異類との結婚……八二
鼠の文芸の伝統……八五
鼠浄土と根の国……八八
『かくれさと』の趣向……九一
鼠の嫁入の起原……九四
お伽草子と世相……九八
『猿源氏草紙』の成立……一〇一
問題の所在……一〇一
伊勢と近江……一〇三
鰯売の伝承……一〇六

鰯売の地位……一〇九
遊行者の性格……一一二
『文正』と『猿源氏』……一一四
歌物語の傾向……一一七
お伽の衆の職分……一二〇
和泉式部の説話……一二四
正伝と俗伝……一二四
和泉式部と道命……一二九
書写山と誓願寺……一三五
遊行女婦の伝承……一四二
本地物の構造……一四九

はじめに……一四九
『熊野の本地』……一五一
『厳島の本地』……一五三
『伊豆箱根の本地』……一五五
『諏訪の本地』……一五七
『日光山縁起』……一五九
おわりに……一六二
『日光山縁起』の構造……一六四
前後二段の物語……一六四
有宇中将の遍歴……一七〇
小野猿麻呂の武功……一七五
本地物の中心……一八二

筑波山の信仰と文芸……一八五
筑波山の歌垣……一八五
男女二体の神……一八八
神の往来の伝承……一九一
蚕影山の縁起……一九八
信仰の変遷……二〇二
あとがき……二〇五

お伽草子の研究

お伽草子の意義

南北朝から江戸初期にかけて、短篇の物語草子が多く作られている。それらの作品は、室町時代物語・室町時代草子・室町時代小説・近古小説・中世小説など、さまざまに呼ばれているが、一般には、お伽草子の名で知られている。室町時代の物語草子の総称として、お伽草子という名称が適当であるかどうか、それについては、いくつかの説が出されてきた。室町時代の物語草子の性格は、お伽草子の意義を中心に検討されてきたともいえよう。

何よりも確かなことは、『文正草子』『鉢かづき』などの二十三篇の作品が、お伽草子という名で呼ばれていたことである。おそくとも江戸時代の中ごろまでに、大阪の書肆渋川清右衛門

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

が、『御伽文庫』とか『御伽草子』という名をかかげて、それらの二十三篇の叢書の板行をおこなっていた。そのような二十三篇のうちで、『猫の草紙』などは、あきらかに江戸初期のものであるが、その他の作品は、だいたい室町時代にできあがったと考えられる。その後の用例を探ると、お伽草子の範囲がひろがって、二十三篇と同類の作品までも含むことになったようである。喜多村信節の『嬉遊笑覧』では、『浄瑠璃十二段』をお伽草子に加え、山東京山の『歴世女装考』では、『貴船の本地』『富士の人穴草子』をお伽草子と記している。しかし、江戸から明治にかけて、大多数の文献記録では、やはり二十三篇の叢書に限って、お伽草子と認めていたといえるであろう。

明治の末から大正にかけて、萩野由之博士の『新編御伽草子』や藤井乙男博士の『御伽草紙』には、二十三篇と類似した作品がいくつか取りあげられた。その頃から、お伽草子の範囲が、一般にひろく解されるようになったといってよい。そうした諸家の見解をまとめ、明快な断定をくだしたのは、島津久基博士の「御伽草子論考」(『国語と国文学』八巻十号、『国文学の新考察』所収)であった。その結論によると、お伽草子というのは、「鎌倉末から江戸初期に亘る童話味を帯びた通俗小説」であり、「室町時代の小説の汎称」としてもよかろうという。その

ようなお伽草子観が、ひさしく学界でも通用してきたのである。

それに対して、別の方面から、お伽草子の語義を吟味しようとする動きがおこってきた。お伽草子のお伽ということばは、お伽咄とかお伽の衆などと熟して用いられている。そういうお伽の意義について、折口信夫博士の「お伽及び咄」（『国文学論究』六号、『折口信夫全集』十巻所収）、柳田国男先生の「御伽噺と伽」（『民間伝承』三巻五号、『定本柳田国男集』七巻所収）には、それぞれすぐれた新見が示されている。また、桑田忠親博士の『大名と御伽衆』では、戦国時代から江戸時代にわたって、大名の側近に仕えたお伽の衆の実態が、かなり詳細に説かれている。桑田博士の研究によると、お伽草子というのは、お伽に用いられた草子、お伽の席で読まれた草子にほかならない。そこで、本来のお伽草子は、婦女童幼のためのものではなくて、多くは武辺咄や怪異談のようなものであったと推定される。それにつけても、改めて考えなければならないのは、そういうお伽が、室町時代の物語草子と、どのようにつながるかということであろう。お伽の意義についての研究は、戦後にもひきつづきおこなわれた。荒木良雄氏の「庶民文学としての お伽草子」（『文学』十九巻十号、『中世文学の形成と発展』所収）には、「とぎ」の語源は、「口説（くどき）」「絵解」の「とき」ではないかという仮説が示されている。笹谷良造氏の「咄と伽と」

（『国学院雑誌』六十巻十号）、角川源義博士の「御伽考」（『国学院雑誌』六十一巻五号）でも、ともにお伽の問題が取りあげられている。特に角川博士の論文は、夢解や絵解との関係から、「とぎ」の原義をとらえようとしたものである。なお、現行民俗における興味ふかい事例が、井之口章次氏の「お伽衆」（『仏教と民俗』一号）などに報告されている。

お伽草子が、お伽に用いられた草子であったとすれば、お伽の意義とともに、草子の意義についても考えなければならない。お伽草子の定義をくだすにあたって、特にその外形に注意をむけたのは、笹野堅氏の「『大橋の中将』と『山中常盤』(上)—御伽草子名義考—」（『国語と国文学』九巻九号）および「御伽草子攷」（『室町時代短篇集』所収）である。その説によると、「上流の婦女童幼の御伽の草子として、それにふさわしい内容をもったものが、必然的に奈良絵本の体裁を備えたものであろう」という。お伽草子の形態が、絵巻の草子化の方向にそうものであったことは、多くの学者の研究によって認められている。その方面の戦後の業績としては、岡見正雄博士の一連の論文「近古小説のかたち」（『国語国文』二十二巻十号）および「絵解と絵巻・絵冊子—近古小説のかたち（続）—」（『国語国文』二十三巻八号）が注目される。そこでは、絵解のわざと結びつけながら、絵巻や絵草子のかたちを取りあげている。

お伽草子という術語について、今までの諸説をふりかえり、改めて批判を加えたのは、市古貞次博士の「御伽草子と近世の児童読物」（『文学』十九巻八号）その他の論考である。その研究の成果は、『中世小説の研究』と題する著作にまとめられている。そこでは、多くの資料を引いて、まず伽とは相手をすることであったと説かれている。さらに、お伽の用法の変遷をたどりながら、「本来御伽草子は、室町時代に於けるお伽のための草子ではなく、近世中期ごろに於けるお伽の意味をもった叢書乃至は草子なのである」という結論に導いてゆかれる。そのために、室町時代の物語草子の総称としては、お伽草子という語を採らないで、中世小説の語を用いておられるのである。市古博士の『中世小説の研究』では、お伽草子の語義について、いちおう穏当な見解を示されている。しかし、お伽草子にかわる中世小説の語が、かならずしも安定しているわけではない。ただ中世小説というだけでは、鎌倉時代の物語から室町時代の物語草子を区別するのはむずかしい。また、中世の文芸ジャンルに小説という名称を使うのにも、いささか抵抗を感ずるのである。あるいは、室町時代の物語草子と民間文芸との関係を考えながら、お伽草子の語に新しい意味をもたせて使うこともできるのではなかろうか。

資料の紹介と翻刻

江戸中期以後の随筆などを見ると、お伽草子の名が、かなり多く引かれている。当時の文人や作家の間で、室町時代の物語草子が、考証の材料として珍重されたためであろう。しかし、それらの作品自体が、研究の対象と考えられてはいなかったようである。そういう意味では、平出順益の「物語草紙解題」(『物語草子目録前編』所収)が、わずかに注目される程度であった。

明治二十四(一八九一)年、畠山健・今泉定助両氏によって、『御伽草子』二十三篇が刊行された。同三十四(一九〇一)年、萩野由之博士の『新編御伽草子』に、それらと同類の二十篇の作品が翻刻された。同四十一(一九〇八)年には、平出鏗二郎氏の『室町時代小説集』が出て、さらに十七篇の新資料が加えられた。室町時代の物語草子の研究は、そのような資料の翻刻から出発したのである。その翌年に出た平出氏の『近古小説解題』(のちに『物語草子目録前編』所収)は、二百三十三篇の作品の解説を集めた著作であり、その後の研究の基礎をつくった業績

と認められている。大正年間には、藤井乙男博士編の『御伽草紙』が、有朋堂文庫の一冊として刊行された。そこには、二十三篇のお伽草子とともに、十六篇の新資料を収めている。また、『校註日本文学大系』の第十九では、従来の二十三篇から『猫の草紙』を除き、それに二十一篇の作品を加えている。

室町時代の物語草子の研究は、昭和年代に入るとともに、いよいよいちじるしい発展を遂げた。その中心となった島津久基博士は、まず昭和三（一九二八）年に、『近古小説新纂初輯』を著された。それには、十五篇の貴重な作品が収められ、綿密な考説まで添えられている。さらに昭和十（一九三五）年以後になると、新資料の翻刻や紹介は、いっそうさかんにおこなわれた。笹野堅氏の『室町時代短篇集』は、十篇の珍しい作品を載せており、島津博士の岩波文庫本『お伽草子』も、三篇の新しい資料を含んでいた。もっとも大がかりな事業としては、横山重・太田武夫両氏による『室町時代物語集』の刊行をあげることができる。『室町時代物語集』は五巻まで出ており、百三十七部の作品を収めているが、厳密な校訂と周到な解題とによって、特に高い価値を認められている。そのほか、同じ横山氏の編になる『室町時代小説集』なども出ている。また、市古貞次博士の『未刊中世小説解題』には、四十篇の作品の梗概と解説

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.